愛知教育大学教育実践総合センター紀要
第12号，pp. 87～ 94（February，2009）

「日本語・日本文化短期研修プログラム」の整備・充実と今後の方向性
― 試行４年間を振り返って ―

稲　葉　みどり　（愛知教育大学日本語教育講座）

Future of AUE Summer Institute of Japanese Language and Culture

Midori INABA　(Department of Teaching Japanese as a Foreign Language, Aichi University of Education)

要約　本稿では，平成17年度より愛知教育大学で開始した「日本語・日本文化短期研修プログラム」を振り返り，プログラム実施上の課題，今後のあり方，方向等を考察する。このプログラムは，大学間交流協定を結んでいる米国ニューヨーク州立大学フレドニア校よりショートステイの研修留学生を受け入れ，日本語と日本文化を学ぶというものである。ここでは，平成20年度までの４年間（４回）のプログラムの概要を紹介し，実施方法，宿舎の確保，研修費用，単位認定，募集・受け入れ手続きなどを検討する。また，留学生に実施したプログラム対するアンケートを参考に，このプログラムの今後の整備・充実を考える。

Keywords：日本語・日本文化研修，短期研修プログラム，交流協定，ショートステイ

１．はじめに

「日本語・日本文化短期研修プログラム（AUE Summer Institute of Japanese Language and Culture)」は，大学間交流協定を結んでいる大学（以下，協定校）である米国ニューヨーク州立大学フレドニア校（以下，フレドニア校）より研修留学生（以下，研修生）を受け入れ，日本語と日本文化を学ぶことを主眼とした約２週間の短期研修プログラム（ショートステイ）である。平成17年度から始め，平成20年度で４年目を迎えた。プログラムは，ショートステイ型の研修として試行的に実施し，研修生の希望や本学の実情に合わせて毎年変更や改善がなされ，少しずつ充実したものになってきた。

このプログラムは，平成16年度採択教育研究改革・改善プロジェクト経費「グロバル・リレテラシー（国際対話能力）の向上に関する研究（代表者：安武知子)」を契機とし，以下のような実施計画の下に，海外の協定校との連携・協力してキャンパスや大学教育の国際化を推進してきた。

１）海外協定校との対等な学生交換の推進
２）双方向の短期交換プログラムの開発
３）短期研修受け入れプログラムの開発
４）学生の海外研修活動の単位化のための研究
５）外国語で行う授業を増やすための方策の研究

このプログラムの意義，目的，実施の概要，成果，及び，研修生によるプログラム評価については，稲葉（2006a）で紹介した。また，このプログラムが大学教育の国際化や学生のグローバル・リテラシーの向上に果たした役割については，学生に実施したアンケート調査を基に稲葉（2008）で考察した。

よって，本稿では，これまで４年間を振り返り，このプログラムの１）実施時期・期間，２）宿舎の確保，３）応募資格と受け入れ手続き，４）単位認定と授業料免除，５）研修費用などに関して，実施の過程[1]で浮かんできた様々な問題と課題を検討する。また，留学生に実施したアンケートを参考に，このプログラムの今後のあり方や整備充実の方策を考える。

２．４年間のプログラムの概要

「日本語・日本文化短期研修プログラム」は平成17年５月に開始し，平成20年で４年目を迎えたが，毎年，研修生数，滞在期間，滞在形態，研修内容などが少しずつ変わってきた。これは，研修を希望する留学生の事情や希望，受け入れる本学側の様々な制約を鑑みて調整された結果である。以下に１年目から４年目までの概略を記す。

平成17年度（１年目）
　研修生数　４名（男子）
　実施期間　５月17日～６月１日（15日間）
　滞在施設　本学国際交流会館　家族室
　　１名は知人宅滞在
　研修内容　日本語・日本文化研修，及び，交流活動

平成18年度（２年目）
　研修生数　２名（男子）
　実施期間　５月29日～６月13日（14日間）
　滞在施設　本学国際交流会館　夫婦室
　研修内容　日本語・日本文化研修，及び，交流活動

平成19年度（３年目）
　研修生数　４名（男子）

実施期間　５月21日～８月31日
（プログラム期間約７週間）
２週間滞在　１名
７週間滞在　２名
４か月滞在　１名
滞在施設　刈谷市内の家庭にホームステイ（３名）
国際交流会館　個室　（１名）
研修内容　日本語・日本文化研修，及び，交流活動

平成20年度（４年目）
研修生数　８名（男子５名，女子３名）
実施期間　５月21日～６月12日（23日間）
滞在施設　井ケ谷荘（本学非常勤講師宿泊施設）
研修内容　日本語・日本文化研修，及び，交流活動

３．実施時期と期間

このプログラムの実施目的の第一は，協定校との間で双方向の対等な学生の交換を進めることである。フレドニア校には，毎年春休みに本学学生が英語の語学研修，及び，体験留学に出かけている。平成16年度には10名以上の学生がこの研修に参加した。また，平成13年度より日本語教育コースの学生が同校に赴き，日本語・日本文化の紹介を目的としたワークショップ「日本語・日本紹介プログラム」（稲葉，2005）も実施され，平成16年度は５名学生が参加した。

しかし，本学にはフレドニア生を受け入れる短期研修プログラムがなかったので，交流は一方通行であった。

そこで，このプログラムを立ち上げ，受け入れを試みた。したがって，フレドニア校の学生が一番日本に来やすい時期を検討し，学年が終わる５月中旬に研修開始を設定した。一般にアメリカの大学生は夏休みの間学生寮やアパートなどの宿舎を出る。夏休み中に何らかの仕事に就く学生も多いので，研修の時期が中途半端であると，帰国してからの仕事探しや宿舎の確保に支障をきたすことも配慮して，夏休みに入ってすぐの時期を選んだ。

１年目はフレドニア校の学年が修了した翌週の火曜日に来日，水曜日からプログラムのスタートとした。この時期に実施したことで，研修生はちょうど本学の大学祭の直前に来日することになり，大学祭を経験することができた。また，大学祭に訪れた韓国の晋州教育大学と合同の歓迎会を催し，協定校間の交流もできた。

２年目は多少余裕をもって出国できるように１週間遅らせ，学年が終わって翌々週の開始とした。したがって，大学祭後の週の来日で，晋州教育大学とはすれ違いとなった。交流面では，授業が少なく，一番交流を率先できる４年生が教育実習のため１週間ほどで大学から不在となってしまったので，３年生が中心となって活動した。しかし，３年生は専門の授業や実習等でなかなかまとまった時間がとれず，交流の機会を逸したことを残念に思う学生もいた。

３年目も開始時期は同じで，プログラムの期間は２週間として募集をかけた。しかし，研修生からは，もっと長く滞在したいとの希望が出たので，それを受け入れられるように努力し，プログラムを作り直した。４名中１名は２週間で帰国したが，残りの３名の研修期間は７週間となった。さらに，このうち１名は８月末まで滞在し，自分で研修を続けた。

当初，研修期間を２週間と設定したのは，研修生の経済的負担をできるだけ軽減し，帰国後，働くことも考えたからである。よって，気軽に参加できるような短期の滞在型のプログラムを作成した。また，受け入れ側の事情や負担も考慮に入れた。研修期間がもっと長い方がよいとする意見は，１年目から出ていた。しかし，このプログラムの位置づけはあくまで，日本体験と交流を主体とするものであり，本格的な留学を考える際の参考となるものであるので，２年目も研修期間は延長しなかった。しかし，年々期待が高まり，３年目はそれに応じた。

４年目は，当初の２週間を少し長くして３週間のプログラムを作成した。滞在期間の設定は，本学においては宿舎の確保とも密接に結びついている。４年目は井ケ谷荘を利用したが，滞在期間が長くなると宿泊費がかさむので，３週間とした。８名の研修生のうち，２名は２週間で帰国したが，残りの６名は３週間滞在した。しかし，やはりもっと長く滞在したいという意見が出た。

以上，４年間を振り返ってみると，プログラムの実施時期については，ほぼ妥当だと考えられる。米国の大学では，ちょうどサマーコースの時期にあたり，６週間～９週間程度のコースがある。ミドルベリー大学夏期日本語学校の場合，６月中旬から８月中旬までの約２か月（例えば，2009年の場合，６月12日から８月14日までの９週間，単位４ユニット）開講されている。

もし，このプログラムを本格的なサマースクールにするならば，最低６週間ぐらいは必要であろう。開講時期は，日本の大学の学期と合わせると，やはり５月中旬から下旬に開講し，７月中に終了するのが無理ないと言えよう。そうすれば，その後，１～２週間旅行などをしてから帰国し，９月の米国の大学の新学期に間に合わせることが可能である。

４．宿舎の確保

本学でこのプログラムのような研修生を受け入れる場合，一番問題となるのが，宿舎の確保である。本学には，国際交流会館があるが，これは４月，10月に来日した正規生，研究留学生等で満室の状態が多い。５月に来日し，数週間滞在するだけの研修生のために，空室をつくっておくことは，交流会館の有効利用の点からも難しい。学生寮も正規生でない研修生には利用

できない。その上，何名ぐらい応募者があるか予測のつかない状態である。

１年目は宿舎未定の状態で募集をかけた。学生や職員等の家庭への滞在も射程に入れて，なんとか見つけられればと願いプログラムを立ち上げた。幸いこの年は，国際交流会館の家族室に４月入居予定の研究者が，少し遅れて６月初旬に来日することになったため，それまで空室を利用させてもらうことになった。１名は知人宅へ滞在したので，残りの３名の研修生で家族室を共有した。３名とも男であったので，１室で滞在が可能であった。

研修生は国際交流会館に滞在することで，他の留学生から様々な情報を得ることができ，また，日本人学生も容易に訪問することができた。さらに，会館を訪れる国際交流協会の方々も，他の留学生同様にいろいろな会に招いて下さったので，地域との交流もできた。２年目も夫婦室に一時的な空きがあり，２名の研修生を受け入れることができた。

３年目は，４名の応募者があったが，早期に応募し，４か月滞在を希望した１名については，国際交流会館の個室を確保した。しかし，残りの３名については，応募の時期が３月末であった上に，この年は交流会館に全くの空室がなく，宿舎未定のまま受け入れた。４月初旬から，本学学生，職員，及び，刈谷市国際交流課に依頼し，ホームステイ先を探した。１名は２週間であるが，他２名は７週間と期間が長いこと，遠方では通学に時間と費用がかかることなどから，本学学生，職員の中には受け入れ先を見つけることができなかった。しかし，大学近隣の３つの家庭から，受け入れの申し出があり，依頼することになった。どの家庭も食費等，すべて無償でよいとの更なる申し出に感謝の限りであった。

４年目は，男女合わせて８名の応募があった。しかし，この年も全く交流会館に空室はなかった。そこで，本学の非常勤講師宿泊施設である井ケ谷荘を利用させてもらえないか交渉した。井ケ谷荘は，すでに韓国の晋州教育大学が毎年５月に来学する際に利用している。このプログラムの意義と宿舎確保に苦労している状況が大学側に理解され，利用が可能となった。井ケ谷荘は，個室３室と８畳の和室が２室である。全館貸し切りで，８名で話し合って部屋を利用してもらった。

当初は，全員には個室やベッドがないこと，設備がそれほど新しくないことなどを心配したが，予想に反して，井ケ谷荘の評判は良かった。和室と洋室があり，畳の上で，布団で寝る経験ができたこと，キャンパス内にあり，日本人学生とも交流しやすいこと，リビングルームでくつろげることなどが主な理由である。ただし，朝食，夕食と土日の食事には，不便であったようだ。この点は，研修生のプログラムの感想のところで触れる。

４年間を振り返ると，それぞれ良い点があった。国際交流会館滞在の場合は，日本人学生だけでなく，本学の留学生とも交流できたこと，また，そこに訪れる地域の方々とも交流もできたことが挙げられる。

ホームステイの場合は，特に地域の方との学外での交流ができたこと，地域のお祭りなどの様々な行事に参加しできたこと，さらに，本学と地域との新たな繋がりができたことが挙げられる。研修生にとっては，日本の家庭生活を体験できたことは貴重である。２軒のホームステイ先は，自宅で英語教室を開いていて，研修生はそこで英語指導の補助をして，受け入れ側に喜ばれた。日本での英語教育に興味をもっている研修生にとっては，教育情報を得ることができたと思う。このうち，１名はその次の年，本学の短期留学推進制度に基づく留学生に応募し，採用された。

これらの異なる滞在形態によるプログラムの実践を通して，それぞれの長所・短所を知ることができたことは有益である。

５．応募資格と受け入れ手続き

研修生の募集は，１月初旬にフレドニア校の国際交流事務の担当者に連絡し，学生に周知した。特に応募の締め切りは設けなかったが，１年目は３月末までに４名，２年目は３名の応募者があった。研修生は，本学の協定校からの特別聴講学生として所定の手続きを経て受け入れた。

３年目には４名の応募者があったが，このうち１名はフレドニア校の学部のフルタイムの学生ではなく，サマースクールの登録学生（register student）で，普段は仕事に就いている卒業生であった。これは，送られてきた応募書類，履歴書，自己紹介文等を見て判明した。フレドニア校に問い合わせたところ，登録学生もきちんとしたフレドニア校の学生として扱っているとの回答で，送り出しに問題はないとのことであった。

このプログラムは，大学間の協定に基づく交流の一貫という位置づけで試行的に立ち上げ，フレドニア校のフルタイムの学生を対象に募集することを前提としていたので，応募要項には，特に応募資格に関する規定は明記しなかった。したがって，このような学生を特別聴講学生として受け入れることの是非が問われた。結果，この研修生に関しては，特別訪問者（special visitor）として受け入れることとし，本人からも了解を得た。

４年目は８名の応募者があったが，そのうちフレドニア校のフルタイムの学生は２名，フレドニア校の卒業生１名，他の５名はニューヨーク州立大学の他のキャンパスや他大学からの応募者であった。これが判明したのは，やはり５月になって応募書類が届いてからである。以下は，平成20年度の８名の研修生（①～⑧）の出身キャンパス，及び，大学である。

① SUNY Fredonia　９月より４年生
② SUNY Fredonia　９月より３年生　韓国籍留学生
③ SUNY Fredonia　５月卒業生
④ SUNY Oneonta　９月より４年生
⑤ SUNY Buffalo　９月より３年生
⑥ SUNY Potsdam　９月より２年生
⑦ SUNY Albany　９月より４年生
⑧ John Hopkins University（メリーランド州）
（SUNYはニューヨーク州立大学の略）

なぜこのような事態になったのかを知るため，研修生に尋ねたところ，フレドニア校のサマースクール案内のホームページの海外研修（study abroad）の欄に載っていたので，応募したのだという。後ほどホームページを見てみると，本プログラムが紹介されており，応募資格は学部２年生以上で，GPAが2.5以上となっていた（平成18年度の場合）。それ以外に特に規定は書かれていない。

ニューヨーク州立大学は，ニューヨーク州に64のキャンパスがある。この中で本学はニューヨーク州立大学フレドニア校と交流協定を締結しており，他のキャンパスは含んでいない。しかし，ニューヨーク州立大学の学生は，キャンパスを比較的自由に移ることができる。特にサマースクールを利用して他のキャンパスの授業を履修する学生は少なくない。また，米国の大学では別の大学から別の大学のサマースクールを登録することも，可能である。さらに，卒業生や社会人でも，一定の資格を有する者は大学の授業を登録できる。

フレドニア校を含め，夏に多くの学生が海外研修に出かける。各キャンパスには，幾つかの海外研修プログラムが設けられており，そのプログラムの一つとして紹介されていたので，フレドニア校以外から研修生が集まったのである。さらに，それらのプログラムにはこの大学への留学生でも参加できる。４回目に来たフレドニア生のうち１名は，韓国籍で，フレドニア校への留学生であった。

本学の国際化を推進していく上では，フレドニア校以外からも様々な背景をもつ学生が来るということは，学生のグローバル・リテラシーを向上させ，キャンパスや大学教育国際化する上で望ましことである。実際，平成20年度の学生はこれまでのフレドニア校の学生とは異なった面を持ち，フレドニア校以外の米国の大学生活や社会に関する様々な情報を提供してくれた。本学学生も協定校以外の米国の都市や大学に目を向けることができたと思われる。

しかし，本学とフレドニア校の交流協定が締結された際には，このようなショートステイ型のプログラムの稼働を予測していなかったので，想定外の学生が来学することになった。

米国の日本の大学では制度面で多くの違いがある。米国のこのような大学システムを念頭においた上で，このプログラムがうまく稼働するには，応募資格をどのようにしたらよいかを検討しなければならない。この点を協定校とも話し合い，学生の交換条件等を見直していく必要がある。

６．単位認定と授業料免除

このプログラムの特色は，研修修了者に単位を認定することである。所定の30時間の研修を終えた場合は，日本語科目として単位を認定した。プログラムの内容に関しては稲葉（2006）で詳しく述べたので，ここでは，単位認定上で生じた様々な問題について考察する。

このプログラムの研修生は，協定校からの特別聴講学生扱いで受け入れた。フレドニア校と本学の授業料免除枠は協定によると最大４名である。１年目はフレドニア校の正規生が４名で，この枠内であったので問題なく授業料免除で単位を認定した。２年目も同じく正規生２名で単位認定に支障はなかった。しかし，３年目に来たフレドニア校のサマースクールの登録学生は，正規生ではないので，授業料免除の対象とならなかった。したがって，前述のように特別訪問者という扱いで，単位認定はせず，このプログラムの修了証明書[2]のみを発行した。４年目に来たフレドニア校以外の研修生に関しても同じである。

ここで浮き彫りになったのが，米国と日本の大学の「正規生」の考え方の違いである。一般に日本の大学では，特定の科目の単位だけを履修するために在籍する学生，聴講生，研究留学生などは，正規生とはみなしていない。正規生とは，あくまでフルタイムの学生である。しかし，米国の大学では，サマースクールなどに登録すれば，その登録期間中はその大学の正規の学生と扱うようである。本学とフレドニア校との交流協定では，そのような登録学生までをフレドニア校の学生として扱うことは想定していない。協定は，大学間の交流を目的とするのもで，双方の学生の交換，交流をめざしているからである。両大学間で学生が行き来することにより，交流が深まると考えているからであろう。

事実，これまでの本学学生とフレドニア生の交流を見ていると，最初本学の学生が体験留学でフレドニア校に行き，そこで知り合った学生が本学に来る。そして，本学で，知り合った学生が再びフレドニア校に行くというようなことを繰り返してきた。本学学生も向こうでお世話になったフレドニア生が本学に来るのを楽しみに待っており，今度は恩返しをしたいと思っている。フレドニア生も同様で，本学学生がフレドニア校滞在中は，中心になって留学生活を助けてくれている。

しかし，サマースクールの登録学生の場合，登録期間が終われば，それぞれの大学や所属先（職場等）に

戻ってしまい，本学学生がフレドニア校を訪れた際には，不在ということになる。米国の他大学の学生とも交流の機会を持つことは，望ましいことで，これを否定するわけではないが，フレドニア校との学生交換による交流という意図からは少し外れる。

厳密に言えば，１年目に来た１名は５月にフレドニア校を卒業し，卒業式後すぐに本学に来た。応募の時点では，フレドニア校の正規生であったが，本学に来る段階では卒業生ということになる。このような学生をどう扱うかも課題である。

もし，他大学からも学生を募るのなら，全米，または，他の国に向けて本学から募集要項を発信することもできる。今後，このプログラムのようなショートステイ形態のプログラムをどのように周知していくかを再検討したい。

７．研修費用

このプログラムの研修にかかる費用の負担について述べる。このプログラムの実施にあたっては，主に，以下のような費用が必要である（個人的な出費を除く）。

① 渡航費（米国 ― 名古屋往復）
② 空港から本学までの往復の交通費
③ 宿舎（寝具，光熱費等を含む），または，宿泊費
④ 滞在中の食費
⑤ 授業料
⑥ 教材費（教科書，文具，資料代等）
⑦ 学外研修にかかる費用（交通費，昼食代，入館料等）
⑧ 歓迎会，交流会，懇親会の費用

この中で，①渡航費は本人，または，フレドニア校が負担するので，②～⑦までが日本に到着してから必要となる費用である。以下に，研修生が日本に来てから負担した費用を大雑把に示した。

１年目 ④ 滞在中の食費
⑦ 学外研修の昼食代の一部
２年目 ④ 滞在中の食費
⑦ 学外研修の昼食代の一部
３年目 ④ 滞在中の食費
（ホームステイの場合は昼食代のみ）
⑦ 学外研修の昼食代の一部
４年目 ③ 宿泊費（井ケ谷荘宿泊代）
④ 滞在中の食費
⑥ 教材費（教科書，文具，資料代等）
⑦ 学外研修の昼食代，入館料

ただし，⑤授業料は不徴収を４名の枠内でフレドニア正規生に適用し，フレドニア登録生には，単位を出さないということで徴収しなかった。残りの費用は，大学側（留学生経費，関係教員研究費，私費等）で負担した。また，交流を主体とする行事には，受け入れ側（刈谷市，交流団体，本学附属学校等）が負担したものもある。

４年目は，フレドニア校より宿泊費，食費，学費，授業料，学外研修費等，必要な費用を直接本学に納めたいとの申し出があり，研修生側が実費を負担した。また，学外研修の一部は，本学留学生の社会見学旅行に加わる形で実施したので，研修生，大学側ともに負担額が軽減された。

この中で，特に時間と経費がかかったのが空港から本学までの送迎である。１年目，２年目は全員が一緒に空港到着し，一緒に帰国したので，送迎は一度で済んだ。しかし，３回目は，滞在期間が異なり，それぞれ異なった日に帰国した。また，４年目は全米から来たので，フライトや到着日が異なった。また，同日の到着でもばらばらで，空港で最初に到着した研修生と共に８時間程度待つか，同日に何度も送迎しなければならない事態となった。帰国の日程も４日に分かれており，中には早朝のフライトの場合もあり対応に苦慮した。特に，他の外国大学からの来訪者や職員研修等の時期に重なり，動ける人材が乏しく，費用面以外の負担も大きかった。しかし，本学学生の協力を得て，なんとか全員を無事送迎することができた。本来の研修以外のところでの負担が大きかったので，送迎の問題は解決策を検討する必要がある。

研修全体に必要な費用については，これまで大学側が大部分を負担してきた。本学の学生がフレドニア校に行った場合，空港送迎や宿泊費や食費（ワークショップの場合）を軽減，または，不徴収という扱いを受けているので，その代わりに大学側もできる限りの便宜を図ってきた。しかし，プログラムを充実させていくには，費用の面でも検討すべき点が多いと考えられる。フレドニア校側も必要な経費は納めるという申し出があるので，それをどのような形で受け入れていくかを検討していく必要がある。

８．研修生からみたプログラム評価

ここでは，４年目の研修生に実施したプログラムに対する感想，意見，提案，評価等に関するアンケートの中から，本稿で取りあげた内容に関連する部分の回答を紹介する。

（１）宿舎（井ケ谷荘）について

以下は，研修生の一人の井ケ谷荘滞在に関する感想が書かれている部分を抜粋したものである。井ケ谷荘は住みやすく，日本風の家に滞在したいという希望通りになってうれしかったことを述べている。そして，電話，インターネット設備が付いていると便利だとコメントしている。

The guest house was quite comfortable. In face I was hoping for a Japanese style home for where we would be staying and I was quite happy with the arrangements.

My last suggestion is to perhaps place a phone in Igaya-so, or the guest house. I wanted to call home several times but the closest pay phone is a bit of a walk. Also a few more Japanese channels and internet would have been cool inside the house, but I won't be greedy about those things.

また，別の研修生は，井ケ谷荘は広く，畳の上に布団を敷いて寝るのが気持ちよかったと述べている。

いがやそはとてもいいでした。*There was plenty of space and the tatami and futon were very comfortable.*

以下の２人の感想を見ると，井ケ谷荘には，一階に屋内玄関，縁側付き和室，２階には３つの洋室と居間があるので，気に入ったようだ。部屋割りは研修生同士で話し合って利用してもらった。

Igaya-so was a very beautiful dorm because it has both tradition Japanese rooms and modern rooms.

It is good place to experience Japanese traditional housing

また，自炊が少しでもできるとよかったとコメントした研修生もいる。井ケ谷荘には，小さな台所があるが，研修生の滞在中には，材料を買ってくるような余裕がなく，料理までいかなかったのだろう。

The housing was very good. It was nice that we were all together in one house, but it would have been nice if we had been able to cook for ourselves at least a little.

できれば，多少の炊事がしやすいよう整えておいてあげられるとよかったが，今回は複数日に渡る出迎えに非常に時間を費やしてしまったので，余裕がなかった。

当初，井ケ谷荘は全員のためのベッドや個室が確保できず，設備も新しくないことから，外国から来る研修生の滞在先として不満がでるのではないかと憂慮していたが，以外にも，滞在を楽しんでくれた様子で，非常に安心した。

（２）生協食堂と食事について

研修生は主に生協食堂で昼食をとっていたが，食べ物はどれも美味しく，口に合ったようである。以下の３名の感想では，特に口に合わずに困った様子はない。米国の自分の大学の食堂より良いと書いてくれている人もいる。

I liked everything basically. The food was much better than that of my school, the living conditions were quite comfortable and the people were all friendly and understanding.

おいしかたです。*And the prices were good.*

The food was excellent I enjoyed trying different kinds of Japanese foods.

しかし，朝食と夕食をとる場所を見つけるのに，少し時間がかかったようだ。

The cafeteria at lunchtime was good, but it took some getting used to be able to find food for breakfast and dinner everyday without the use of a kitchen.

さらに，週末は生協が休みなので，不便だったようである。

Food was good, however it was hard to get food at afternoon and weekend

（３）研修費用について

研修生は，このプログラムの登録に関して，フレドニア校で所定の登録料を納めている。本学はそのうちの最低限の実費をフレドニア校から預かり，プログラムを実施した。しかし，必要実費の中には，個人旅行や出費は計上していない。

以下の感想を書いた研修生は，休日を利用して近隣に出かけたようで，その時の交通費が予想以上にかさんだようだ。あらかじめ，ある程度の交通費を必要実費に計上しておいた方がいいと提案している。

The only suggestion I would make is to include a train pass in the course fee. Traveling around was quite a big expense and I found myself spending more money on just transportation than anything else.

同じく，以下では，日本の公共交通機関は便利だが，交通費が高いと述べている。

All of the transportation was very convenient. Although much more expensive than I realized! It was nice having the buses to Kyoto and the Sumo place.

日本に *transportation* はたかいです。でもはやい。

できれば，今後はこちらでの滞在費の中にある程度の交通費を計上しておきたいと思う。

（4）研修期間について

日本でしてみたかったが，できなかったことは何かという質問に対して，以下では，東京への旅行がしたかったが，新幹線の料金が高く行けなかったこと，「ザ・ラストサムライ」という映画に出てくるような田舎の町への旅などをしたかったが，３週間では期間や費用の制約がありいくのが難しいことを挙げている。

I really wanted to visit Tokyo. I heard they have robots that help direct traffic and other cool things. However I couldn't afford the ¥10,000 one way ticket by train. I also would of liked to see an old style Japanese village, one that kind of looked like the village in The Last Samurai. A trip to where the Samurai came from would of also been cool. There are a lot of things I wanted to see, but couldn't because of the 3 week time limit and expense.

研修期間については，もう少し長い方がよいというコメントは４年目も出た。

The next suggestion is to increase the course time to a month or more. I am really upset that I am going to be leaving very soon. If I had the chance I would happily stay here longer.

費用や受け入れ側の負担も考えて，無理のない程度で期間を長くすることを検討する必要がある。

（5）キャンパスライフについて

本学での生活については，キャンパスがきれいで，全体では不満はないとの感想である。

The campus is small and cozy. I have no complaints.

しかし，類似した建物が多く，目当ての場所を探しにくかったという感想が出た。

Many of the buildings and classrooms look similar so it was sometimes difficult to find different places.

The campus is nice, a more extensive tour of campus or a longer explanation about what facilities are around would have been helpful.

４年目は研修生の到着日がばらばらで，予定より遅くれて到着したので，プログラムの時間を確保するため，最初に到着した学生に学内を案内し，教室等の場所を教えた。よって，全員集まってからキャンパスツアーをする機会を逸してしまった。この感想を見る限り，学内の案内をもっと詳しくする必要があった。

その他，交通機関は安全で便利だが，最終バスが早過ぎると感じたようだ。

Public transportation was safe, however I think service time was too early to end.

プログラムに含まれる学外研修は，公用車や借り上げバス，タクシーを利用して移動した。それは，個々に負担するより安くなるし，便利だと述べている。

Transportation was great because there were vans to bring us to every trip.

The transportation given to us for trips were perfectly fine. Transportation for when we were just exploring got quite costly however. A train pass I think would have been useful.

以上，プログラムに対する感想の一部を紹介した。これらを今後のプログラムの充実に活かしたいと考えている。

９．プログラムの整備・充実に向けて

このプログラムは，協定校からの留学生を増やし，交流をより活性化するねらいで始まった。特に米国からの留学希望者が少ないのは，文部科学省の短期留学推進制度による奨学生の枠が非常に少ないこと，また，私費で一年間留学するには，費用がかかることが大きな原因と思われた。

そこで，できるだけ費用を抑えて本学に体験留学してもらうには，このような短期集中型の研修プログラムが適当であると考え，試行的に稼働する運びとなった。

このプログラムは，最初何人ぐらいの応募があるか全く見当のつかない状態で始まった。また，本学ではこのようなショートステイ型の留学生（研修留学生）を受け入れる施設がないので，どこに滞在するかも未

定のまま募集に踏みきった。そして，様々な問題を乗り越え，４年間無事に継続することができた。

毎年，事務職員，教員，関係者が知恵を出し合い，問題を解決した。そのおかげで，受け入れ体制やプログラムの内容は少しずつ整のってきた。研修留学生も少しずつ様変わりし，フレドニア校以外の大学の学生からも興味を引く日本入門プログラムに成長したと考えている。

米国の大学の夏休みを利用して，あまり費用がかからず，短期間で日本や日本の大学生活を体験でき，さらに，単位も取得できるというのが，このプログラムの特徴である。

たしかに，２～３週間では，時間が限られており，本格的な日本語学習や日本文化研修は難しい。しかし，このプログラムは，本格的な留学を考える際の体験留学で，協定校との国際交流を主体としたものと位置づけで実施してきた。

しかし，プログラムに参加した学生の感想やフレドニア校の対応を見る限り，年々プログラムへの期待は高まってきたと思われる。特に，研修期間を長くして欲しいという希望は大きい。実際に２年目に来た２名の研修生は，翌年再度このプログラムに参加したが，２週間という設定で募集をかけたのにもかかわらず，約２か月近く滞在した。

長期の滞在を希望するなら，正規留学で本学に来ることも可能で，前述のように実際に３年目の学生は，次年度短期留学推進制度に応募して，採用された。しかし，奨学生の枠は小さいことには変わりはない。

よって，今後このプログラムを見直していく際，どのような位置づけで実施していくかを再検討する必要があろう。

10. 今後の展望

本学の国際交流をより活性化していくには，今後，このような短期研修型プログラムをいくつか開発していくことが重要だと考えられる。例えば，

１）日本語・日本文化研修コース
２）ビジネス日本語研修コース
３）日本語教育者養成コース
４）英語教育者養成コース
５）日本の教育研修コース

など，本学の専門性を生かした様々なコースが考えられる。これらを年度ごとに交替で開講することも可能であろう。

その際，検討すべき事項は，海外の大学から来やすい時期に研修期間を設定し，内容を鑑みて研修期間を設定する。また，必要な費用（実費等）を明確にし，募集の段階で明記する。研修修了後の修了証明書の発行や単位認定をどうするかをあらかじめ決めておく。さらに，募集要項に応募資格，募集人数等を明確に記す。また，どのような方法で周知し，募集するかを検討するなどである。

もし，本学だけでなく，各国の協定校を窓口としてホームページに載せてもらえば，周知の機会が増える。また，協定校を窓口として申し込んでもらえば，単位互換等の手続きを協定校の方でその国の大学の実情に合わせて判断し，代行してもらえる。参加費用も協定校が現地で徴収し，納めてもらえば，個人個人が本学へ送金するよりも取り扱いが容易である。為替レートや手数料等の問題も解決される。そして，本学の世界的知名度も上がると考えられる。

本稿では，「日本語・日本文化研修プログラム」の４年間にわたる実施の状況や試行錯誤の過程を紹介した。本稿が今後の研修や留学プログラムの開発や国際交流プログラム作成の参考になれば幸いである。

注

[1] 本稿では，プログラムの外枠である実施上も問題点や課題に関してのみ考察し，日本語研修・日本文化研修，学外研修などのプログラムの内容の検討については，別稿としたい。日本語の授業の内容の一部は稲葉（2006b）で紹介した。

[2] あらかじめプログラムのシラバスを送付し，フレドニア校と話合いをしたので，修了証明書で単位認定してもらうことが可能であった。

謝　辞

このプログラムは，地域，大学，教員，本学附属学校園等のご協力やご厚意により実施することができました。また，学外研修やホームステイ等においては，刈谷市国際交流課，刈谷市国際交流協会，アイシン精機相撲部の方々からご協力やお招きをいただきました。この場を借りてお礼申し上げたいと思います。

参考文献

稲葉みどり（2005）.「米国における教育実習プログラムの成果と充実の方策」『教育実践総合センター紀要』８号. pp. 145-156.

稲葉みどり（2006a）.「日本語・日本文化短期研修プログラムの開発と実践」『教育実践総合センター紀要』９号. pp. 35-42.

稲葉みどり（2006b）.「自己発信型の日本語力の養成 ― 体験密着型のオリジナル教材を活用して」『教養と教育』６号. pp. 17-26.

稲葉みどり（2008）.「国際交流と学生のグローバル・リテラシーの向上 ― アンケート調査による効果の分析」『教育実践総合センター紀要』11号. pp. 33-40.